

入試雑感

本年度の入試問題について、たくさんの方に問題に直接触れている編集委員が率直な感想を述べる。

(大字の出典は、本問題集に採録)

古文

今年度の入試は、ここ数年の有名出典が多かった傾向から一転し、受験生には馴染みの薄い出典が目立つ結果となった。平安時代成立の作品は少なく、近世の作品が多く見受けられたのが特徴である。

全体として本文自体は比較的読みやすく、傍線部にも重要語や定型句を含むものが多かった。そのため、どの大学であっても、手も足も出ないという受験生は少なかったであろう。一方で、文法・単語の知識を単純にあげはめるだけでは十分な解答には至らない設問も多く、リード文や注の内容も踏まえながら解釈するなど、情報を整理する必要がある設問が目立った。いわゆる「国語の技術力」、すなわち文脈を正確に把握し、根拠に基づいて的確に記述する力を問う出題が増加した。『狭衣物語』(18 東京大)では、リード文から状況を把握したうえで、当時の死生観や風習の知識を用いて解くことが、『別本八重葎』(14 九州大)では注に示された『伊勢物語』の一節を踏まえて解答することが求められた。昨年度の共通テストが比較的易化した分、二次試験においてこうした有機的な読解力・記述力を深く測ろうとする大学側の意図が反映されているとも考えられる。

もう一つ注目すべきは、定番の語彙・文法事項の知識から一歩踏み込んだ表現を問う設問である。『許六離別詞』(3 北海道大)では「夏炉冬扇」「排簾小船」(6 東北大)では「万代不易」といった表現を言い換える問題が出題された。また『木草物語』(16 京都大)や『吉野詣記』(2 岡山大)では、ともに「吉野が桜の名所(歌枕)である」という古典常識を前提とした設問が出題された。入試問題の演習を通じて、馴染みの薄い表現への理解や、季節感や情趣とともに親しまれてきた土地や景物への造詣を、いっそう深めてもらいたい。

とはいえ、どの大学においても、引き続き基本的な語彙や文法の知識を問う設問での得点が期待されている。日頃から地道に語彙・文法の学習を重ねながら、同時にリード文・注・本文を有機的に結びつけて読み、設問に的確に答える訓練を怠らないことが、今後ますます重要になるだろう。

漢文

本文の分量は、一部の大学を除き一ページ程度に収まっている。問題本文の易化は著ち着きを見せた。複数の文章を並べた問題は今年はほぼ見られなかった。

出題は句法・用法が手がかりとなるものが多いが、出題箇所(傍線部)で直接問われていなくても、解答には句法の知識が必要な場合もある。再読文字は頻出であるので必ず習得しておくこと。反語や使役だけでなく、詠嘆、受身、限定、二重否定、仮定、比較など幅広く出題されている。書き下しや口語訳とともに「復(まづ)亦(また)」「如(ごと)く」「如(ごと)く」「己(みづか)み」「耳(みみ)などの読みも頻出である。「自(いづ)も」「猶(なほ)」「蓋(けだし)」「夫(そ)の読みも出題された。また「人間」「布衣(ふい)」などの意味も問われている。難関大では、句法の知識を前提として、さらに文脈を踏まえて考えさせる問題も多いので、日頃から漢文を読み慣れておくこと。

記述の量については、名古屋大で一五〇字の記述が出題されたほか、六〇、八〇字前後の記述を求める大学も多く、まとめる力が試される。また、傍線部の説明問題であっても本文全体を踏まえて書くべき場合もあり、どこまでをまとめるのかを判断する必要がある。もちろん、本文だけでなくリード文や注は解答のヒントになるので必ず読み、理解の助けとしたい。とくに中国独特の文化が関わる問題は、リード文や注をよく読む必要がある。対句的な表現にも注目すること。ジャンルについて、「随筆・評論」にあたるものは、「分甘余話」(22 神戸大)や「顔氏家訓」(名古屋大)などが出題された。「日本漢文」は「錦洲餘珠」(24 九州大)や「芭蕉文章」(大阪公立大)などが出題されている。諸子百家など「思想」にあたる文章は「荀子」(鹿児島大)、「韓非子」(佐賀大)や「列子」(19 福島大)など複数出題された。詩は「白氏文集」(東京大)からの出題はあったが、全体の傾向としては少なかった。ただし、押韻や対句、詩の構成など詩の基本事項は解釈のヒントともなるので確認しておくこと。「歴史」は「史記」(岡山大)などから出題された。「説話的文章」も「閻微草堂筆記」(23 北海道大)、「晏子春秋」(25 大阪大)、「涑水紀聞」(27 東北大・新潟大)など多数出題された。総じて評論などの論理的文章よりも、説話集に加え、歴史や思想、日本漢文でも物語要素のある文章が多いことが今年の傾向であった。